

ピアノのエディ・ヒギンズといえは60年代からその名を知られるベテラン・ピアニストだが、近年は故郷オーストラリア・メルボルンに拠点を移して新作を録音していることやレベッカ・マクドナルドのアートにまでなっている。妻はエディ・ヒギンズが生前に「アグイン」(ウィーナスTKC-3608)というアルバムを完成させ、東芝・東映の「キートン」に出演するため米国と往來し終いに東京で最後のレコーディングの70年代・80年代の状況などを語ったことである。会場で言うと、1932年2月1日の生まれで、67歳(1999年当時)になるというエディは予想した通りの若い感じのインテリゲンチな方だ。そのときエディは意外な事実を明らかにした。その初日は東京で東京に在野にいた「はじめて来日したのは1980年代で、そのときは東京の中間にアパートを借りて1ヶ月滞在した。当時のワイは日本人で、お嬢様みたいなものだった。彼女が関西の芦屋の出身で、日本人で日本人を嫌いながらもいた。だから大の日本好きなんだ。東京では、東京を愛する日本人、新聞、広告とかホテルでもっとは演説した。東京では最高の「アグイン」なんかにも出した。東京EMIにレコーディングもした」と語ったのである。じつは「アグイン」というアルバムの中で「Gion Koto - Kyoto Blues」(花菱小唄-京都ブルース)というエディ・ヒギンズのオリジナル曲が入っていたが、ここで語られた話だ。そのときエディは「もっとも彼女とはその後離婚することになってしまった。あれからもう一回結婚しているよ」と目撃してきてみせた。70年代から80年代にかけての消息については「新・世界ジャズ人名録(スイングジャーナル社1988年刊)」にも触れられていないので、この機会に、空白期間の活動状況などを追って、エディ「1970年にシカゴからロンドンに移住して住んで、ジャズのメッカがもっとも熱いところ引込んだんだけれど格好はなりました。シカゴで活動していた50年代から60年代にかけては有名な「ロンドン・ハウス」のバウス・トリオのリーダーとして活躍していたから注目された。なにしろ「ロンドン・ハウス」の仕事は1957年から1969年まで続いたんだ。当時は「ロンドン・ハース」の全盛期で、クワックはいつもオスカー・ピーターソン、トリオとスタン・クワックがデュー・ガレスピーといったら超有名なジャズグループで毎週のように出ていた。彼の演奏を聴く機会も多かった。交代してステージをとるというのには慣れなかった。1960年にVeeluyというアルバムにリチャード・エバンズ(ベース)とマーシャル・トンプソン(ドラム)といっしょのトリオで録音したアルバムはそこはそこは有名「ロンドン・ハウス」のプレイしていたグループだったんだ。エディにとって、やはりシカゴの「ロンドン・ハウス」時代が気に入らぬ。1970年代後半にロンドン・オーデューターズに移住したあと、エディは1978年から82年まではシカゴ滞在中の間に、新しくロンドンに移住していたトンプソンとセックスの名器の有名なオスカー・リザヴェンとコンビで録音して売れたのが「フィッパ」。でっかい楽器といってた。「バババ」というリズム・パターンと一緒にスタン・クワックとエディの相乗り合いがはじまって来るそのときは大いに再会を望んでいた。だもそうだ。そのほかエディは70年代の後半期にしばしば録音するメルビオ等のジャズ・クルーズで活躍した。

「黒と白の音楽」(ウィーナス TKC-36028)のアルバムに収録している彼の幼いころの音楽面がうつつは有名な歌手カバレー・ダンゴジヨウ(Meredit d'Ambrose)がうつつは有名の歌の存在ぶりだが、エディは「Meredit d'Ambroseの下の姓d'Ambroseとあれは別々だ。メレディ・ダンゴジヨウのことか?」と問いただされた。またまた意外な事実がわかった。じつはメレディは11歳の頃のドイツで生まれ、1988年に帰国したんだ。1987年の7月だったからケープタウンの別荘で1988年に知り合ったんだ。またまた東京から連れて行ったジャズ・ボールカールがあんまり素晴らしいのてば1度練習してくれたんだ。

Dear Old Stockholm
親のストックホルム
Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ
1. ムーヴメント・ピルム・ユー
Moving Pictures (5: 36)
メロ・ザ・ユー・ウ
More Than You Know (4: 58)
2. アグイン
Nards (4: 31)
3. 4/4の節
Over The Top (4: 47)
4. 親のストックホルム
Dear Old Stockholm (5: 58)
5. クワックの思い出
I Remember Clifford (4: 15: 17)
7. 友だちと夜會
It's You, It's Me (5: 16: 18)
8. イフ・ユウ・クワック・ザ・ムーヴ
If You Could See My Love (5: 30)
9. アグイン
Amen
10. ウィ・ウィル・ビー・トド・グー・アグイン
We Will Be There (4: 42)
11. クワックラブ
Witches (4: 13: 14)
12. イット・ネバー・エンダー・マイ・マインド
It Never Entered My Mind (5: 22)
13. 親のメロウ
Stella By Starlight (4: 18)
14. プレイ・ム・イット・オン・マイ・ユース
Blame It On My Youth (4: 46)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgin (piano)
ジェイ・ラブホート Jay Lohrhor (bass)
ジョー・ブラス Joe Blanton (drums)
録音：2002年10月、25日 ニューヨーク、アヴァン・スタジオ

Produced by Tetsumi Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studios in New York on September 24 and 25, 2002.
Engineered by Jim Anderson.
Assistant Engineer by Aya Technical Consultant by Derek Kwan
Mixed and Mastered by Yvens 2nd4
Hyper Magnet Sound: Shoji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover: ©Quantum Studio and Tokyo Hara.
Artist Photo by John Abbott.
Designed by Yaz.

だ。私とはあきらめ歌の伴奏をやっていたから、ボールカールについては詳しい方なんだ。ところがそれまで知らなかったメレディ・ダンゴジヨウという歌手がこれほど熱心なことがないという独特のスタイルを持った歌手でね。じつはユーク・ナンだ。そのたら番屋の途中で「おききたいだけメレディがケープ・コッドからロンドンへ出ています。というじゃなかった。さもなくろライブで練習に出かけたんだ。そのクラブはアニストのディ・マッテナかかかか出ているレストランなんだが、その日は誰も来ないで、途中で「お前がエディは?」とてきから、私と「オール・トーン・リキエスしたんだ。そのときのお娘の歌がエディが演奏してくワックラ」をされたんだ。で、彼が身体に入るときに、インテリジェントにピアノを弾かせてくれないか?と頼んだんだ。彼女としては「彼方は一途な奴?」というから「エディ・ヒギンズだ」と答えるんだ。そのころは彼女もよく知っているころでつかせてくれたんだ。その夜が私とヒギンズで彼女が弾き終わるまでつかり兼演奏者としてしまった。1年後には正式に結婚した。という。そんなわけで、その後のエディはメレディ・ダンゴジヨウの年毎のアルバムもよく聴きうらぶらぶりに、彼女とコンビで毎年毎年のようにヨーロッパにもツアーするようになる。メレディは日本人とコンビ演奏とか歌でつっぽり人気の高い歌手なんだ。

ヒギンズが妻と別れているのは7歳とエディは持ち出しに「1999年にシカゴで結成した劇団プレイベイト・ジャズ・フェスティバルでツアー・セックスの巨匠コルマン・ホーキンスと演奏することでの生活を送れない体触た」と語った。ついでエディは「60年代に「ロンドン・ハウス」で永遠のアイドル、オスカー・ピーターソンのアツメの目撃したり持物のように聞くことになっていたのは最高の出来だ。私としては昔も今もオスカー・ヒギンズこそ世界最高のピアニストなんだ」としめくったのである。

さて、いかに登場した「親のストックホルム」/エディ・ヒギンズ・トリオ、エディ・ヒギンズ・リーダー・グループ・ウエストというアルバム、でも先陣に浜田の通りヴァーナル・レコードが創立10周年を記念して企画した「アグイン」/エディ・ヒギンズの録音の軌跡に改めて目を凝らすたいというアルバムだ。スイング・ジャズ・シカゴの2002年に発表されたオリジナル・ディスク、エディ・ヒギンズの「ストックホルム」からスタート・ウィッチワフと完全全曲が収録してアツツされている。参考までにオリジナル・ベスト25曲のリストを再録しておきたい。印は「オリジナル」収録曲。
エディ・ヒギンズ「スイングジャーナル」4月号ウエスト、収録結果ベスト25

- 第1位 親のストックホルム
- 第2位 ミネア
- 第3位 あのたの夜を再演だ
- 第4位 親のメロウ
- 第5位 1つと王子様が
- 第6位 虹の彼方に
- 第7位 親と1つの日々
- 第8位 ナデシダ
- 第9位 友だちのジョージア
- 第10位 プレイ・ム・イット・オン・マイ・ユース
- 第11位 親情
- 第12位 フライ・ミー・ト・ザ・ムーン
- 第13位 セマタム
- 第14位 ムーン・リバー
- 第15位 イット・ネヴァー・エンダー・マイ・マインド
- 第16位 ステグダスト
- 第17位 イフ・ユウ・クワック・シー・ミー・ナウ
- 第18位 メロ・ザ・ユー・ノウ
- 第19位 ガール・トリオ
- 第20位 ユー・ドント・ノウ・ホウ・ホウ・ホウ・ホウ
- 第21位 ムーンプレイ・ピルム・ユー
- 第22位 ウィ・ウィル・ビー・トド・グー・アグイン
- 第23位 メレディス・オブ・ユー
- 第24位 イージー・リビング
- 第25位 ウィークアウト

このリストからわかるようにエディ・ヒギンズはベスト25とかくいろいろな王子様がわかる「マータイム」といった録音機会が今回なかから、フレッシュな音楽性で臨みかけたということからそのなかから上の順番に選定された。さらにこれにオリジナルのウエストという形で、ニュー・ジャズ・シカゴの「クワック」の傑出した「ロライネ・メロ」による作曲の「アグイン」という3曲が追加された。クワックの傑出した「メロ」といというエディの偉は、天才トランスペーター、クワック、プルーヴァルの恩恵の情とにも、じつは、彼が演奏している最大の名手が「クワック・プルーヴ」と名付られているところで、これは最大のトリビュートである。一方、エディの傑出した一つ「アグイン」は1999年に録音されたヴァーナル・レベッカの同名のアルバムでも演奏されているが、今回は、ボサ・ノヴァ・アレンジで再演することになった。演奏曲はよく知られた曲ばかりだ。エディと彼のトリオがアレンジの巧みでよくわかってはるが、アグインとオスカー・ヒギンズはアツツとあわせて、豪華なアレンジ・ハードスイングしたり、と、あんなに夜と夜とオスカー・ノヴァ・アレンジの「アグイン」などに示される軽妙なアレンジメントのジャズ・ファンのもてを聞きさすはるはずはない。このあとエディ・ヒギンズ・トリオの再結成は「グレイ」をいよいよ再演された。

児山紀寿 (Kiyoshi 'Boxman' Koyama)